

緑地探訪 都市緑地と生物多様性（大手町の森）

梶川昭則

東邦レオ株式会社 (kajikawa@toho-leo.co.jp)

都市緑地におけるグリーンインフラ（以降 GI）の推進は、今では広く知られるようになってきた。GIには様々な機能があり、微気象改善、カーボンニュートラルへの対応、CO₂の削減、雨水貯留浸透効果、ウェルビーイングなど、その評価手法に関してもある程度定まってきたと思われる。しかし、GI機能の1つである生物多様性に関しては、様々な取り組みは行われてきているが、評価手法はこれからの状態と考えられる。

京都大学の森本幸裕名誉教授¹⁾が、生物多様性について次のように述べられている。生物多様性は、生物学的な自然環境の要素と構造の全体像を示す言葉であるが、地球環境の持続可能性の大きな懸念材料として、生物多様性の危機が認められるようになり、ともすれば地球環境における希少種保護における機能のみ注目が集まる関心を、広く生物界全体へ、さらに地球環境における機能的な側面や生態系サービスの認識へと導く「革命」とも捉えられる。

生物多様性としては、損失をどれだけ食い止めてゆくかが重要なポイントとなるが、近年では都市開発、水質汚染、里山の減少、管理の縮小、外来種問題、化学物質の処理など、様々な問題が山積みの状態となっている。環境省では30by30目標²⁾を掲げ、陸と海の保全活動の推進を行っているが、保全地域以外での生物多様性に資する地域（OECM）も併行して力を入れている。

ここでは OECM に登録されている都市緑地として「大手町の森」³⁾を取り上げる。2013年9月に完成したもので、GI機能としては生物多様性効果に配慮した都市緑地として紹介したい。「大手町の森」とは、東京駅周辺に位置し、高度なビジ

ネス機能が集積する大手町に建設された大手町タワー（高さ200 m）の外構屋上緑化（人工地盤緑化）である。建築主は東京建物株式会社で、大成建設株式会社が建築設計、造園設計及び建築工事を行い、都市緑地としては内山緑地建設株式会社が手掛けたものである。約3600 m²の敷地への人工地盤緑化であるが、ここで行われた技術として特徴的なのが、「プレフォレスト」と言うものである。都市の中で失われつつある潜在自然植生を復元してゆくことを目的として、千葉県君津市にある内山緑地建設の圃場で3年間かけて作り上げた自然の森を、様々な検証試験を経て、ごっそりそのまま大手町に移植を行ったものである。高木樹186本、中低木約590本、地被植物約56,000本というもので、その中には自然界で見られる様々な生態的手法も用いられている。森林が豊富な地域であれば、目新しいものではないが、大都市の中にこれらのもを持ち込み維持管理して、アメニティ空間を形成しようとしていることは画期的と考えられる。現在竣工から11年を経ているが、都市緑地に即した維持管理の他、鳥・昆虫・草類のモニタリングも実施しており、様々な知見の集積がされていると思われる。都市における生物多様性を考慮した技術として「プレフォレスト」という考え方は、今後都市緑地でのスタンダードとして広まることを期待したい。

引用文献

- 1) 森本幸裕・亀山章編（2001）ミティゲーション - 自然環境の保全・復元技術，ソフトサイエンス社，354pp.
- 2) 環境省（2023）30by30に係る生物多様性の見える化手法検討会の報告：資料2-3
- 3) 公益財団法人都市緑化機構 緑化技術コンクール 第16回 環境大臣賞 屋上緑化部門 大手町の森

設計図通りに仮植え ▶ 様々な検証を実施 ▶ そのまま計画地へ移植



図-1 プレフォレストのイメージ³⁾



写真-1 現地に設置された「大手町の森」説明板

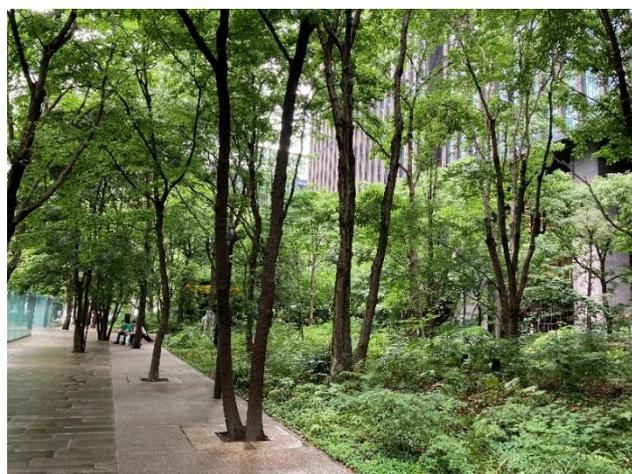


写真-2 都市のアメニティと生態的空間の共存